

「覇権主義と非暴力」

評議員 登尾 唯信

二月二四日にロシアによるウクライナへの軍事作戦が始まった。世界中が、連日、報道される戦争の悲惨さ、犠牲者の姿に心を痛め、地獄の様相を呈する映像に戦慄を覚えている。

ウクライナへのロシアの侵攻は明確に侵略である。しかし、ロシアだけが悪いのかということについて、今、アメリカの元軍人で政治学者のジョン・ジョゼフ・ミアシャイマーのユーチューブ動画、「ウクライナ戦争を起こした責任はアメリカにある」(日本語字幕つき)が注目されている。それによれば、「米欧は『ウクライナのNATO

〇(北大西洋条約機構)入りを絶対許さない」というロシアの警告を無視してきた」、「米英はロシアの侵攻が始まる前から、ウクライナへ大量の兵器と軍事顧問団を送り『武装化』を促していた」というのである。(二〇二二年四月一八日毎日新聞「ウクライナ 別の視点」参照)

ロシアが一方的に悪いのではなく、アメリカやNATOの覇権とロシアの覇権の衝突と見ている。ここで覇権とは武力をもって競争者を抑え得た権力、覇権国家とは軍事力、経済力、政治力、あるいは他の国々を圧倒する力を持ち、国際的なシステム

を創造し、維持しようとする国家であり、今はアメリカがその唯一の覇権国家ということができる。ミアシャイマー発言の脈絡から言えば、アメリカの覇権主義が様々な国際緊張を生んで来たし、今後も軍事的緊張を生むと想像できる。日本も沖縄の基地問題を始めとして、アメリカの覇権主義に組み込まれているのである。

安倍元首相が、戦争放棄を明記した憲法九条が社会規範になれば他国を侵略できないとする考え方は現実離れしていて、「空想」「思考停止」と批判し、アメリカの核兵器を日本に配備し、共同運用する核共有政策を巡る議論を呼びかけている。(ウェブ版東京新聞二〇二二年三月四日)しかし、軍事力を背景としたアメリカの覇権主義に

追隨する、軍事力には軍事力という現実主義こそ、また次の戦争を生む極めて危ない考えであり、思考を停止していると言わなければならない。

一九四五五年のアジア太平洋戦争の終結から、本年は七十七年になる。かつては戦争に行つた世代が、戦争は地獄を作り出す行為であることを証言し、戦争体験のない世代は学んできた。しかし、戦後生まれの人が人口の八割を越えた今、戦争を体験した人の声を直接聞くことは難しくなっている。二度と戦争しないという決意が表明されたものが『日本国憲法』の前文であり、前文とセットになった第九条(戦争放棄 戦力の不保持 交戦権の否認)である。

浄土真宗本願寺派教団(以下、本願寺教団)には、戦争体験や

犠牲者の平和への願いを受け継いできた戦没者追悼法要がある。法要の表白文の抜粋である。「とりわけ先の大戦は十数年の長期にわたって全世界を戦火で覆いました。その間幾千万の人々が『いのち』を失い親を亡くし子を奪われて悲嘆にくれた人は数を知りません。今でも喪った肉親のことを朝夕に思い出し悲しみをあらたにしている人も少なくありません。わけても『殺してはならない』と仰せられたみ仏の御誠めを破って武器を取り聖戦の名のもとに戦場に赴かねばならなかった仏教徒たちの悲痛な心を決して忘れることはできません」(『表白集』本願寺出版社一九九六年)。

「殺してはならない」という非暴力の精神は、釈尊の「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛おしい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」(『真理のことば』一三〇偈)から導き出されるものである。「戦場に赴か」せたものは、絶対天皇制を創出し、「大日本帝国憲法」のもと、国民を天皇の臣民として戦争に駆り立てた当時の為政者たちであり、日本が併合し、侵略した朝鮮や中国に別院を建て、軍に武器を献納するなど、戦争遂行に積極的に協力した本願寺教団である。何よりも非暴力であるべきはずの僧侶が武器を執って戦場に赴き、門信徒を戦争に送り出した。これらの教団の戦争責任は七七年経っても確認しなければならぬことである。

非暴力については仏教だけでなく、マハトマ・ガンディーが有名である。ガンディーがなぜ非暴力の行動者となったのかについて、以下のように語っている。「わたしが妻を自分の意志に従わせようとした時のことでした。妻は一方では断固としてわたしの意志に抵抗しながらも、また一方では黙って従順にわたしの愚行に耐えてくれましたが、そのことが結局わたしを恥じ入らせ、自分

は生まれながら妻を支配することになっていくとの愚かな思い上がりを変えました。こうしてついに、妻がわたしの非暴力の師となったのです。」(『わたしの非暴力』)意外にも非暴力の淵源は国家レベルの話ではなく、身近な性差別の克服に起因するものであった。思えば、戦争は専ら、男性が行ってきた。戦時下の性暴力も男性の問題である。しかしまた、非暴力は性差に関係なく、あらゆる人間存在の根幹になればならない思想であると思う。

また、他の国家や民族に対する差別心も戦争の原因である。抹殺されてよい国家や民族があるはずはない。それこそまさに人間の思い上がりである。非暴力とは個人レベル(身

心)と国家レベル(制度、システム)において、支配、被支配関係からの脱却を志向する考えであり、また、個々人のいのちの尊厳を守る思想であり行動であるということができ

る。「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」という究極の非暴力思想は、国際社会における「専制と隷従、圧迫と偏狭」(憲法前文)の除去に不可欠であるし、私たちは強く教団内外に発信しなければならない。非暴力は一見すれば理想主義的である。しかし、理想は現実の諸相を判断する基準であり、理想が基準となるからこそ、現実の真偽を見極めることが出来る。一方、現実主義は現実をありのままに見るので真偽の見極めが難しい。非暴力という理想から言えば平和は真であり、暴力や戦争は偽である。軍事力増強へ走る体制国家、覇権主義、現実主義に追随してはならない。